

滋賀県障害者文化芸術活動推進計画検討懇話会
第2回会議 発言録

- ◆ 日 時 : 平成31年(2019年)3月20日(水) 15:00 - 16:40
- ◆ 開催場所 : 滋賀県危機管理センター1階 会議室1
- ◆ 出席者 : **【委員】**
中谷 委員(座長)、久保 委員(座長代理)、北岡 委員、北村 委員、古久保 委員
野澤 委員、村田 委員、山下 委員、山中 委員
【事務局】
〈県民生活部〉宇野 次長、田原 文化振興課課長、西川 文化振興課主幹
〈健康医療福祉部〉丸山 障害福祉課課長
- ◆ 議 題 : (1) (仮称)滋賀県障害者文化芸術活動推進計画 骨子(案)について
(2) その他

◆ 議事概要 :

発 言 者	発 言 内 容
	<p>■ 開会</p> <p>県民生活部 宇野次長 挨拶</p>
	<p>■ 議事導入(委員報告等)</p> <p>委員提供資料 説明</p>
座 長	<p>■ 議論①(仮称)滋賀県障害者文化芸術活動推進計画 骨子(案)について (構成、基本理念、基本的な方針、計画の期間、等)</p> <p>それでは早速ですが、議事のほうに進めたいと思います。 それでは、事務局のほうから議題のことについて、御説明よろしくお願いたします。</p>
事務局	<p>資料1および資料2のうち、「計画策定の趣旨」「これまでの滋賀県の主な取組」「滋賀県における障害者による文化芸術活動の推進にあたっての課題」「計画の位置づけ・計画期間」「基本理念」「基本的な方針」について説明</p>

発 言 者	発 言 内 容
座 長	<p>事務局の説明ありがとうございました。 今概要についての御説明でしたが、何か御意見がありましたら伺いたいと思いますが、いかがでしょうか。</p> <p style="text-align: center;">(質疑なし)</p>
座 長 事務局	<p>■ 議論②(仮称)滋賀県障害者文化芸術活動推進計画 骨子(案)について (施策の方向性、具体的な取組について)</p> <p>では、続いて説明をお願いします。</p> <p>資料1および資料2のうち、「施策の方向性」について説明。 委員の皆様には、施策の方向性として三つの柱について、また、それぞれの柱に基づく、具体的な取り組みについて御意見を賜りたいと存じます。</p> <p>なお、本日も欠席の委員からは、 美術分野だけでなく、舞台芸術分野においても、充実されている内容だと思う。 気になることとして、4ページの、「親しむ」の鑑賞機会の取組の②で、「障害の特性に配慮した鑑賞サポート等のサービスを充実させた公演」という記述について、鑑賞サポート等で、包含されているので、サービスという言葉は必要ないのではないか。</p> <p>4ページの、「親しむ」の鑑賞機会の取組の③で、「文化施設の職員や福祉事業所職員等の鑑賞機会を提供するものが・・・」という記述について、舞台芸術分野では福祉事業所職員が鑑賞機会を提供するというイメージがないが、美術の世界では、そういったことがあるのか。</p> <p>5ページの、「つなぐ・支える」の主な取り組みの②「学校や福祉施設等の職員が技術分野の専門家等から、文化芸術活動を支援する方法もあることができる研修会の充実」とあるが、同じように、文化施設や文化事業者、アーティストなどが福祉分野の専門家等から、障害の特性ですとかその支援方法を学ぶことができる機会を設けることも必要ではないか。 といったご意見をいただいております。</p>

発言者	発言内容
座長	<p>計画骨子案の概要ならびに施策の方向性、大きな柱「親しむ」「つなぐ・支える」「活かす」ということで、委員の皆様それぞれの立場で今御説明にあったことならびに、我々のそれぞれの立場として、こうした計画を作成し、実施していくために、こういうことを望んでいるとか、どういうことに進んでほしいか、どういう内容にしてほしいか、というご意見があれば、それぞれ伺ってみたいと思います。</p>
委員	<p>私ら障害を持つ子の親の立場として、これから先 5 年、10 年先のことを考えると、不安なこともあります。アール・ブリュットを始めさせていただいて今年でちょうど 9 年目になります。</p> <p>その中で養護学校に通っているときに、美術の先生に見出していただいたわけですが、それまで私たち自体もアール・ブリュットという言葉も知らないですし、県の取り組みなど知らなかったもので、それが 9 年前にこういう形で、アール・ブリュットでうちの子の作品を取り上げていただいて、今があるわけです。その中で親としては、将来的に子供が作品をつくっていくことや、(社福) グローさんや多くの方に応援いただきながら、私が作品の管理をしているのですが、著作権の問題や所有権の問題、あとは売買した場合のお金のやりとりのことなど、作家本人がなかなかできない場合もでてくると思いますので、いろいろと皆さんに御協力していただきながらしていければと願っているところです。</p> <p>何よりもまず 9 年前に、うちの子を見出していただいたときに、養護学校の先生がたまたまうちの子の絵を見てちょっと違うと、一度もっと大きい紙の上に書こうと進めていただいたこと、その頃はそんな紙らしい紙には書いてなかったのを、大きな紙を用意していただいて、それに作品を書いたことが、自分の思いを一気に紙にかけた、それが大変よかったみたいで、一気に 105 サイズぐらいの大きさの紙 8 枚ぐらいかけました。そのことがきっかけでコンクールに出してもらい、賞をいただきました。このあたりから、もともと人前でしゃべれない、恥ずかしがって大勢のところにはいられない、という性格が少しずつ変化するきっかけとなったと思います。</p> <p>アール・ブリュットを通じて、マスコミの方などいろいろな方と出会うことになり人前でしゃべることも慣れていった感じです。また、現在ドキュメンタリーの映画をつくってもらって、各地域で上映をしてもらっていますが、上映会が終わった後に舞台挨拶みたいな形で監督さんと一緒にしゃべる機会があり、その姿を私が横で見ている、大丈夫やろかっていうようなことはもうほとんどはなく安心して見ていただけるようになりました。</p> <p>これは、やっぱり見出してもらった養護学校の先生のおかげですし、そうした学校の先生等、障害のある子の身近にいる人のいろんな意見を聞いていただきたいと思います。</p>

発 言 者	発 言 内 容
座 長	<p>また、著作権や所有権の問題で、もう少し具体的にこういう風にしたら良いといった意見や知見を知ることのできるようになればと思います。</p> <p>さらに、作品の販売による対価についてより具体的に理解できるようになれば良いと思います。</p> <p>ありがとうございます。</p> <p>今本当にキーワードとして見出すという言葉が出ていましたが、これは健常者も含めていろんな小学校で出会った先生たちとのかかわり、見出していただいてそれぞれの人生があったと思うし、多分そういうきっかけがいろんな自信にもつながっているということだと思います。</p> <p>また、問題としては制作の場所や発表、それにまつわるいろんな諸問題、というところの解決も必要になるのではないかと、このことだと思います。</p> <p>さらに、養護学校の先生等の連携、より現場に近い先生方が学校で、一人でも多く芸術性を見出すチャンスをつくれるような機会というものを、施策の具体的な取組に含める必要があると思いました。多くの障害を持つ子供たちが世に出ていくとチャンスがふえることのできる内容が必要と感じます。</p> <p>ありがとうございます。</p>
委 員	<p>私たちは、先生に見出してもらえたから、おかげさまで障害のほうもそれで少し軽減されていくし、よかった部分がたくさんあります。</p> <p>アール・ブリュットによって認めてもらって、今こうあるんですけど、他にも多くの方がおられると思います。そういう方をこれからどんどん見出していただけるような環境づくりを期待したいと思います。</p>
委 員	<p>たしかに障害があると、絵を描くことだけではなくて、仕事においても人間関係は健常者に比べて、支障があると思います。</p> <p>ただ、障害があるからアール・ブリュットで進めるとかではなく、障害があっても無くても、一人の人間として考えることが大事だと思うのです。</p> <p>アール・ブリュットっていうのは、障害者の有り無しは関係ないと思います。</p> <p>どうしてもアール・ブリュットっていうのは、アール・ブリュット=（イコール）障害者みたいな感じで思われているような気がしますが、実際はそうではなく、障害があっても無くても関係なしに、絵を描いているいろんな人と交流したいと思うのは、当然普通の人でも障害のある人も同じだと思います。</p>

発 言 者	発 言 内 容
座 長	<p>そうです。</p> <p>小室さんが歌っているように、我々はホモ・サピエンスという共通項の中にいるわけで、そこに隔たりはないと思います。</p> <p>ありがとうございました。</p> <p>障害のある子供たちといろいろな接しながら作品をつくってきておられる立場で、どういう方向性で、どういう施策をとという御意見がありましたらお聞かせください。</p>
委 員	<p>先ほどの映像を見ても思いましたし、今、委員のお話も聞かしてもらって思ったのは、自分たちだけでやっているのではなくて、関わる人々が多種多様になることで、やっているパフォーマンスが深まってさらにその強度が上がっていくのではないかなと思うのです。</p> <p>関わる人っていうのは、例えば舞台つくる私たちであれば、本当に舞台上の舞台監督とか照明音響っていうスタッフの皆さんもそうですし、作品をつくるっていう部分においては、稽古場であったり、制作現場をマネジメントする人であったり、衣装とか美術とかいろんな人たちと関わることで、その自分たちのやることが、強く、そして何か明確になっていくんだらうという気がするんですね。</p> <p>それを、障害があるからとかそういうことではなくて、純粋に舞台を作る、総合芸術をつくるために、必要な人材というかブレンが、まずどこにいるのかっていうのと、私たちがやろうとしていることに対して、共感して一緒につくりたいと思ってくれる人がどこにいるのだからかっていう、お互いに探し求めあう状況だと思います。それは単に湖南ダンスみたいに障害のある人たちを抱えるグループだけではなくて、本当にダンスを純粋につくろうと思ったときに、必ず起こってくるのですが、障害のある人たちが入ったグループとなると、より関わる人たちとの出会いが難しくなる部分もあるし、逆にだからこそ知り合える人材っていうのもたくさんいるのではないかなというのがあります。ですからお互いに情報発信し合えることができる、出会いのチャンスというか、いわゆるネットワークをつくるということ、自分たちがやっている稽古とか制作の現場を、施設の中で閉じたところでやっているのではなくて、町の中で、人々が行き交う中で、やっていけないのかなということを非常に強く思います。</p> <p>あと実際その作品を発表する場も、もちろんダンスなど劇場でやるのが普通なのかもしれませんが、それこそ町の中ですか、商店街の空き店舗とか、その作品を発表するためにここでやるとすごくいいよねっていう場所がたくさんあると思うのです。美術にしてもダンスにしても音楽にしても。必ずしもその1000人入る大劇場が必要なわけではなくて、小劇場であったりライブハウスであったり、もしかしたらどこか公園みたいなところかもしれないし、琵琶湖の見えるところ</p>

発 言 者	発 言 内 容
座 長	<p>かもしれないですし、そういう発表の機会、発表できる場自体がどんどん開けていったらいいのではないかなとすごく思います。</p> <p>ついつい既成のホールとかかというような考え方が多くなりますが、演奏のチャンスをやす、というところでその場所をいろんなところでできるといことで、施策を実行するにあたっては、既成のホールにとらわれず、多くの人前できるといようなチャンスを具体的にどう作るかが非常に大事なことだと感じます。</p> <p>ありがとうございました。</p>
委 員	<p>続いて、作業所での具体的にいろんな方との体験等をとおして、御意見がありましたらよろしくお願ひいたします。</p> <p>まずはこうした組織や制度がさらに活発になっていくことについては本当に非常にありがたく喜ばしいことだと思っておりますし、今発表いただいたこの内容について、僕からですね何か追記があるとか御質問をさせていただくというふうなことはなく、非常に感謝すべき内容であるなというふうに思っております。</p> <p>ただ、先ほど委員からのお話もありましたように、やはりうちの事業所の利用されている方々についても、取り組みを提供させていただくことによって、一つの表現が社会とつながって評価をいただくというふうな結果になったことは、御家族はもちろん本人も喜ばしいことにつながっているということはあります。</p> <p>そもそも僕たちは施設においてこういう芸術活動については全くの遠い存在というか無関心層で就労を目指しながらいかに社会に適應できるかというふうなことを考えながらさまざまな下請け作業をしておりました。そんな折、信楽であった世界陶芸祭のときに、もちろん北岡委員をはじめ池谷先生などが、滋賀県内の全ての作業所を回っていただき、表現活動に取り組んでみないかということを一軒一軒回ってくださったことで、粘土での作品制作を試みようかという機会に恵まれたんですね。</p> <p>実際にこの調査によって滋賀県内でもたくさんの事業所での取り組みが始まったと感じていますが、僕はまだまだこうした芸術活動に対する無関心層が現在も多いと思うのです。そうした無関心層（事業所のスタッフやその管理者なり）が本計画や施策にいかに関心を示すかが大事であり、事業所にいるたくさんの利用者は、こうした作品制作の機会も与えられない現状の方が多いので、支援学校の先生ならびに事業所のスタッフの意識を変えていくような何か具体的な取り組みっていうのができればと、つくづく思っております。</p> <p>そもそも事業所では日々の支援や作業に追われてしまうことが現状で、滋賀県にいる障害のある方、全ての方々が1度2度3度と、こうした表現活動に携わる</p>

発 言 者	発 言 内 容
座 長	<p>機会をまず持てるような仕組みを整備できればと思いますし、たくさんの可能性を秘めた人がたくさんいて、その人たちが社会に評価されることによって周りのスタッフや支援する人、家族や社会も変わっていくのではないかなというふうに思っております。</p> <p>ただやまなみ工房は、けしてアーティスト養成所でもありませんので、美術・芸術の世界に一方的に導くということではなく、常に考えるのは本人や家族が今行っている活動が本人の望むことであるか、それぞれの幸せに向かっているかどうかというふうなところが大事だと考えていますので、この計画の中にその思いをしっかりと落とし込んで活動していきたいなと思います。決してやまなみ工房が成功例でも特別なことをしている訳でも何でもないのです、本計画をともし県内の障害者のある方々が今以上に芸術活動に触れることが出来、新しい自分の可能性や活躍の場を見出すことが出来ればいいと思います。そのためには自分自身もこの活動の大切さを地道に伝えていければと考えています。</p> <p>ありがとうございます。</p> <p>御意見は、今、活動してる、文化芸術に接する機会が少ない人もまだまだいるということで、施策の「つなぐ・支える」「活かす」という大きなこの柱の中で、きっかけづくりにつながる具体的な取組を進めるために、一人でも多くの方がこの動きに参加するようになれば、こうした活動がより広がっていくのではないかと、という御意見だったと思います。</p> <p>ぜひそういうことが広がるような施策を具体的に考えていかなければいけないと思いました。</p> <p>ありがとうございました</p> <p>続いて御意見をよろしくお願いいたします。</p>
委 員	<p>障害のある方に音楽等を楽しんでいただく取組について、例えばベッドのまま音楽をお楽しみいただくなど、これまででもできる限りのことに取り組んでおりまして、障害のある方にもたくさんご来場いただいております。ロビーで行うコンサートでも、先ほど事業所の意識という話もありましたが、意識のあるそういう事業所からはですね、「今回何人行きます」とかといった感じで事前に御連絡いただき鑑賞いただいております。</p> <p>これは健常者にも言えることだろうと思いますけども、やはりそれぞれの事業所とか学校とかそういったところの意識がもう少し舞台芸術を子供たちに楽しませようとか、障害のある方に舞台芸術に触れさせるっていう意識が大切なんじゃないかなという思いがあります。</p>

発 言 者	発 言 内 容
座 長	<p>今回の計画の理念や施策の方向性については素晴らしいことが書いてありますし、問題ないのだと思うのですが、これを具体化していく、実際に運用していく中で、財団としては、びわ湖ホールだけではなく米原の文化産業交流会館や、地域創造部という地域のホールのネットワークを活かす取組を進めるセクションもありますので、今後いろいろと具体化していく中で、財団としてできることを皆様の御意見も聞きながら取り組んでいきたいと、先ほどからの皆さんの御意見聞きながら感じていたところでございます。</p> <p>ありがとうございます。</p> <p>今、世の中では従来ホールは、車椅子の席が3つだの4つだのといった部分の対応が主だったと思うのですが、そうではなくて、聞こえない人が来たときに、どのように伝達するか、例えば振動とか、いろんなところで企業も、普通のコンサート普通の劇場にもそういったものを持ち込もうと、美術館で作品を触ってみようといったことも含めて進んでいると思います。</p> <p>この中で、鑑賞する場所、表現する場所、制作する場所、伝習する場所、集まる場所、発信する場所がないということが一つの課題かなと思いますので、各地域のホールとの連携についても、この計画が何かいいきっかけとなって進んでいけばよいのではと思います。</p> <p>今後ともよろしく願いいたします。</p>
委 員	<p>今、座長からいただいた、特に鑑賞する機会に関して言うと、今の美術館は昭和59年に開館ということで、バリアフリーなどハード面について、改善はしてきておりますが、まだまだ不十分なところもあります。</p> <p>特に駐車場からですね、美術館まで石畳の道があってガタガタの道なので、車椅子等でも非常に通りにくいといったところもありますので、そのあたりはこれからも改善すべきことですし、またソフトの面でも、触る展示等、そういうことまで取り組めておりませんでした。これから新しく開館していくときにはそういうところもできれば考えていきたいなと思います。</p> <p>美術館に関して言いますと5ページの(3)「活かす」の③で書いてありますが、御案内の方もいらっしゃると思いますが、少し補足して御説明いたしますと、前回11月のときにはまだ新生美術館の取り扱いが少しはっきりはしておりませんでした。先週県議会も閉会をしまして、来年度予算等も認められまして、それに基づく方針でいくと、2021年度早期の再開館というのは、今の近代美術館の基本的には建物をそのまま使いますけれども、いろいろその照明とか内装とか、消火設備とかそういうものを少し今の時代に合った形、あるいは老朽化をしている部分を改修して老朽化対策を施した上で、2021年度の早期に再開館しましょう</p>

発 言 者	発 言 内 容
座 長	<p>ということです。</p> <p>そのときにはアール・ブリュットの作品が既に 114 点収蔵しておりますので、そういうものもしっかり展示していきたいということでもあります。</p> <p>では、もともとの新生美術館で目指していたものがどうなったかということですが、新生美術館という形でのものについては、もう一度仕切り直しのような形で 2020 年度にその基本計画そのものを見直して、その中で、美の滋賀の拠点となる美術館、近代美術館そのままではなくて、さらにそれをバージョンアップするような、パワーアップするような美術館の機能向上というものを目指していこうとしております。</p> <p>そういう中で、さまざまな可能性・期待も含めてこれから検討したいということでございます。</p> <p>あと、先ほどからの御意見を聞いておまして、委員の御意見にもありました、福祉施設なり福祉事業者のスタッフの方の意識のことについてご指摘がありましたが、一方で、事務局から紹介のあった、鈴木委員の御意見でその逆方向の芸術分野の方が福祉の現場から学ぶべきだ、ということもございまして、また私ども美術館も、学芸員というのは基本的に美学・芸術の分野での知識は持っておりますが、アール・ブリュットの作品を今まで収集する中でも、作家の方にどういふふうに接していくのか、どういう形で作品の購入とかまでつなげていくのかについて、手探りの部分がありまして、北岡委員のスタッフの方にも先輩としていろいろ御指導もいただきながらやってきたということがあります。</p> <p>やはり福祉なり学校なり、そういう現場の職員と芸術分野の方のスタッフが、お互いにスキルなり意識や理解というものを相互に持つ、そのことによって障害者の文化芸術活動というものの支援というのがより豊かになっていくのかなと感じた次第です。</p> <p>ありがとうございます。</p> <p>僕も音楽やっていますが、ヨーロッパの美術館では音楽コンサートなども開かれております。教会など、日常の中でもたくさんの芸術表現をする場所として活用されています。</p> <p>美術館は特にスペース的に、展示はもちろんのこと、演劇をするにしても音楽をするにしても、有効な場所と思いますので、スペースの開放というところも協力していただけるといいのかなと思います。</p> <p>ありがとうございました。</p>
委 員	<p>資料を読ましていただいて、いろいろ最近感じる事、思うことがあります。</p> <p>こうした計画は、もちろん障害のある方のための施策だし、活動推進でいいと思</p>

発言者	発言内容
	<p>うのですが、一方で、一般の我々鑑賞する側のためのものでもあるのだろうということをよく思うのです。</p> <p>なんというか、今ですね、何でもネットにつながっていて何でも知ることができるし、なんでも疑似体験できるのですけれども、この障害者の世界ってなかなかまだ未体験ゾーンのほうがいっぱいあって、これからの社会とかですね、これが一般の人々にとってすごく資源といいますかね、いろんなことを考えていく上で大きな宝庫のような感じがしています。</p> <p>なぜこんなことを最近思うのかといいますと、「世界のエリートはなぜ「美意識」を鍛えるのか」という新書がでていますが、わりとこの手の本が出ていますね。で、リーダーって何かといいますと、ビジネスの世界の経営者のことなのです。つまり経営学、MBAとかで学ぶ経営学だとか経済学の理論とかといったものは、みんな同じ事にたどり着くので、そこでコモディティー化、みんな平均化・標準化しちゃうっていうんですね。</p> <p>なので、コスト競争になって、結局日本なんか負けちゃう。そうじゃなくて、それを超える、論理とか科学を超えるものを今、世界のビジネスのリーダーたちが求めようとしていると、それは何かというと、美意識を磨いて直観を鍛えるっていうんですね。それで、経営学よりも美術教育の方に興味を持つリーダーが増えているということです。</p> <p>考えるとこれからAIとかが全て、論理や科学でやるようなことやってしまうわけです。</p> <p>では、人間しかできない、それを超えるものってというのは、やはり美意識だとかを磨く中で見つけるしかないんだ、みたいなことが書かれていて、そう考えると、特に芸術の中でも、障害者がやるものってというのは、論理とか科学とは対極にあるかもしれません。先日のフランスでの湖南ダンスの公演は、私にとってすごい衝撃でした、以前ナント市でも観たんですが、今回のパリの公演ははるかに衝撃だったんですね。</p> <p>何なんだろうと、まだ自分でも咀嚼しきれてないんですけども、舞台に登場する障害のある彼らがまったく空気を読まない。誰が何にも影響されずに、全く毅然として彼らが存在しているわけであります。我々が身につけてしまう自制心だとかその場の空気を読んでしまうとかいったものとは全然異なる、もう毅然としたものを感じていて、何といいますか、その精神の開放というか、魂の自由さというか、そんなものを感じるわけです。</p> <p>そこに北村委員のダンスだとか、ピアノが入るとまた違う芸術の世界を創りだして、見せてしまうわけです。</p> <p>全く無軌道な彼らのピアノとか体の動きが、何かあたかも芸術のように見えてしまうというのは何だろうな、って思うわけなんです。</p> <p>何かそういうものは、もうビジネスだけじゃなくて、例えば政治とか、いろんな他の分野にとっても、いろんなインスピレーションを与えるはずだなと思ってい</p>

発 言 者	発 言 内 容
座 長	<p>て、多分これから一般のそういうビジネスの世界だとか、説明のあった骨子（案）には学校や福祉施設の職員が出てきますけれども、そうではない、ビジネス界だとか政治の世界だとか、これまでこういう分野とは全くかけ離れた人たちが、多分これから注目してくるだろうなって、何となくそういう予感がしているんですね。</p> <p>ですから、今こういう計画を打ち出すっていうのは、すごく大きな第一歩になってくるのではないかと考えています。</p> <p>それと、やはり場所っていうのはすごく大事ななと思っていて、北岡委員と何度かフランスに行った際に、エマニュエル・トッドというフランスの歴史人口学者にインタビューさせてもらったのですが、彼の本を読んで彼が言うのは、「場の記憶」と言っていて、長いスパンでいうと、その地域やその国で暮らす人っていうのは、絶えず生まれては死にを繰り返す、また移動もするのだけれども、場所というのは独特の文化だとか価値感というのを築き上げていく。これはやはり「場」に集積していく様々な価値観が非常に重要である、ということが書かれています、ナント市にあるリュウ・ユニックという美術館・建物はですね、絶えず地元の人が気軽に家族連れとか若者たちが夜中でも入ってきて、絶えない人の集まり方というか流れというものが大きな力になっているのだろうな、ということを感じたりします。</p> <p>障害者の文化芸術というテーマで、何かそういうものができて、そこにいろんな人が集まって、人の流れができてくるとですね、目に見えて、社会って変わっているんじゃないかなって、ちょっと妄想めいたことを考えたりもしています。</p> <p>ありがとうございます。</p> <p>今伺って、「見る側」のっていうところがすごく、大きなことかなと気づきました。</p> <p>どうしても「する側」の補佐であったり、演奏する・つくり手のことのためにということが主になりがちだと思うのですが、ではなく、健常者の側も体の不自由な方も「見る側」に立つというところも実はあるわけで、両面の部分からバリアフリーを考えていくようにしなければならないのかなと思いました。</p> <p>やはりそう思うと、場所づくりというか発信基地というのがいかに重要になってくるか、というようなことも今感じました。ありがとうございます。</p>
委 員	<p>私も野澤委員さんたちとナント市に行かしていただいて、市民の方がすごく関わって、気楽に触れておられるっていうか、そんなことを感じたんですね。</p> <p>一方で、日本でそういうところあるかっていうと、あんまりないなと思ってましてですね、私、今回この骨子をつくっていただいて、とてもよく書き込んでいた</p>

発言者	発言内容
座長	<p>だいてるなというふうに思っておるんですけども、さらにみんなが、障害のあるなしにかかわらず、文化芸術に触れあって、そしてみんなが「いいよね」といって発信者にもなれるよう、もっと敷居の低い、いろんな人が集って、そして面白がって文化芸術のことに触れ合う、そこで支える人もあらあられてくるでしょうし、見出す人もあらあられてくるのではないかなというふうに思っております、滋賀県内でそういうものが何カ所かあってですね、みんなが気楽に集えて関わってということができると、広がっていくんじゃないかというような感覚を持っております。</p> <p>いろんなことを書いていただいているのが、なんかあまりかしこまったというか、芸術家・専門家と学校とか福祉の職員とかっていう何か、区切ったような縦割りにバラバラとなってしまうような感覚がしてまして、それも大事だけれども、もっとこう市民も含めて、いろんな人に関わってもらって、もっといろんな人が触れ合いながら広めていくってということも一方でやらないと、なかなかみんなが障害の有る無しにかかわらず、文化芸術をもっと楽しもう、もっといいことだから進めようってというような、感覚になっていく、そういう仕組みっていうがあればいいなと感じています。</p> <p>本当に、委員が先ほどおっしゃったように、アール・ブリュットは障害者のためのものということではないんだと、表現をするということについては、ボーダーレスだし、あえて障害者のための云々というようなものではなく、そういうことを考えなくても世の中が自然にボーダーレスに、全ての人たちの表現というものをともに受け入れるというか共有できる・共生できるというような方向になってほしいなと私も思います。</p> <p>委員もそんな思いでおっしゃったかなと思いました。</p> <p>ありがとうございます。</p>
委員	<p>いずれにしても共生社会というか、そういう方向にいろんなことを考えていかなければいけない時代にあって、その共生社会をつくるのに文化や芸術はどういう役割を果たすことができるのか、求められているのか、「美術館と共生社会」というのはどんな形なのかと、もちろんハード面のいろいろな不自由は解消すべきである、といったこともあるでしょうし、いろいろなソフト面も出てくるのだろうと思います。</p> <p>そういうことでは「共生社会と文化ホール」は、どういう関係にあるのかと。文化施設、例えばコンサートホールみたいなところとはどういう役割を担うのか、また担うべきなのかといったことを考え、先日、目の見えない人、耳の聞こえない人が一緒に同じ時間・同じ空間で芝居を見るということに取り組みまし</p>

発言者	発言内容
	<p>た。</p> <p>これは約 1 年をかけて研究会をつくり、実際に見えない人や聞こえない人にも参加してもらい、そして、プロの劇団とどうすることが可能なのかという研究と実践に取り組みました。</p> <p>これまでは見えない人のための演劇だとか、聞こえない人のための芝居だというようなことを設定した公演は日本でも時々行われていたということですがけれども、今回は見えない人も聞こえない人もいて、見える人も聞こえる人もいる中での公演をとおして、何か手がかりはないのかということをして 1 年間議論しながら、2月3日・4日に公開を実施しました。</p> <p>障害のある人たちのアンケートには、芝居の内容がよくわかってとても感動したとか、私たちが置いてけぼりにしないでくれてありがとうとか、またいわゆる健常者といわれる方々も、こういう芝居の鑑賞の仕方があるのか、というようなことをすごくポジティブに言っていただいた。例えば劇場に入ってきた時にどんな劇場の広さで設備なのかっていうことも、芝居が始まる前に紹介をしたり、出演者の情報はどんな衣装を着ているのか、どんな髪型で芝居をしているのかみたいなことも、芝居の始まる前にお伝えしたらどうかとか、芝居の内容も事前に台本を渡してそれを点字に訳したりしながらやっていくっていうことも大事なんじゃないのかっていうようなことを、議論してやってみました。</p> <p>今回の取組はもちろん 100 点満点じゃないんですが、これから共生社会をつくるということと文化芸術という関係を見ると、こういうことを諦めないでやり続けていくという人たちが、文化側にも福祉側にも、そして障害当事者側にも必要になるんじゃないだろうか、というようなことを私は思いました。</p> <p>それから委員のお話で、「場」という問題でいうと、おそらく障害者の展示をする場とかということでは、社会から浮き上がってしまうかなと思ったりもしますので、もちろん美術館という場もあるのかもしれませんが。展示する場所があり、例えば、ダンスの練習する場所もあり、場合によっては古着屋さんがそこで古着をとおして次の世代の子供たちへとバトンタッチするような場所でもあり、児童館でもあり、カフェもあるというような。このような共生型を考える上での拠点をこの際、小さくてもいいので、障害者の文化芸術活動推進計画の中で位置づけ、まずは障害者とそうでない人が一緒に何か、文化芸術をとおして、いいものを作ってこう、また諦めないでいろいろやっていくということ。そのための場づくりというものが、共生社会を創っていく上で大事ではないかと思いました。</p> <p>最後に、先ほどの芝居のことで付け加えると、障害のある人が芝居を見るために必要な合理的配慮とは何か、ということをおもったときに、それは言葉であります。言葉というのは手話だけではなくて、字幕であったり、指文字であったり、指点字であったり、点字であったり、そういう言葉をどういうように、いわゆる聞こえない人や見えない人との間でどんな言葉を編み出してって、一緒にやっていくのかということが、すごく重要だなということをおもいました。</p>

発 言 者	発 言 内 容
座 長	<p>僕は文化芸術というのは一方で娯楽だと思うので、娯楽を共有できないで一緒に生きてゆく社会などはつくれないだろうと思います。</p> <p>そういうことでは文化芸術の役割はすごく大きいと思っております。</p> <p>小さい子供たちは、みんなドラえもんに触れて大きくなるわけですが、先日、芝居作りの中で障害のある人と話していると、「俺、ドラえもんって知らないんだよね」とか、「私、ドラえもんの映像は見たことあるけど声を聞いたことないんだよね」とか。そういう中であって、大人になった瞬間に一緒に生きていきたいと思いますということになると、やはり娯楽をどうやって共有しながら一緒に暮らしていくのかっていうことが、重要なことなんだと。それが文化芸術をとおして価値観を共有できる場であるとか拠点が必要になるのではないのかということをおもいました。</p> <p>ありがとうございます。</p> <p>本当に拠点づくりというのがすごく重要なポイントだと思います。</p> <p>僕は前も話したかもしれませんが、糸賀先生と直接お出会いし、骨子（案）にも書いてありますが、「この子らを世の光に」という「この子らに」という言葉にすごく打たれました。発想が「に」じゃないのだと。常に何か偽善者的なことになってしまわないようにというように心にしております。</p> <p>また滋賀には「三方よし」というすばらしい言葉もあって、企画したり演じたり見る側、それがボーダーレスに、障害のある方と無い方とが一緒に芸術家としてやっている姿から常々衝撃を受けています。</p> <p>こうしたことがこれから具体的に計画になった時に、「この子らを世の光に」の哲学が生きるようなことで進んでいくことを心から願うばかりです。</p>
座 長	<p>■ 議論③ その他</p> <p>これまでいろんな御意見たくさん伺いました。</p> <p>第 2 回の懇話会ということで、事務局から一つの方向性を示していただきましたが、また今日もいろいろな意見、お話がたくさん出てきましたけれども、それを踏まえて、今後の計画策定に向けて、現場の方であったり、先生であったり、いろいろな関係者を巻き込んで、いろんな方の御意見も反映して物事が進んでいくことを、僕個人としては願っております。</p> <p>もし御意見がなければ、事務局のほうに進行をお返ししたいと思いますがいかがでしょうか。</p>

発 言 者	発 言 内 容
	<p style="text-align: center;">(質疑なし)</p> <p>ではここで事務局にお返しします。 本日はありがとうございました。</p>
事務局	<p>■ 閉会</p> <p>閉会の挨拶</p> <p style="text-align: right;">以 上</p>